

## 第46回 Kozoom28 「円空展を鑑賞して思う」

### 清水健二

今年2月2日～4月7日迄あべのハルカス美術館で「円空展」が開催されていて鑑賞してきた。私が趣味で彫刻を楽しんでいることを知っている大学時代の同期の友人から案内役を要請され3月下旬に4人で訪ねた。30年ほど前に円空(1632～1695)の生誕地である岐阜県で開催された円空展を鑑賞したことがあったが、今回の展示は約150体の出品で前回は凌ぐ多さであった。私が彫刻を始めた最初は仏像彫刻だったこともあり、如来、菩薩、明王、天部という種別の他に各時代の特徴を知るため、指導を受けていた先生から名作の模刻を写真を見ながらの基本を勉強した。仏教の伝来した6世紀の飛鳥時代は、大陸の影響を受けていた様式も、奈良時代に入って日本人好みの容貌に変わり、天平期には現在



「円空展」鑑賞(右から2人目 清水)



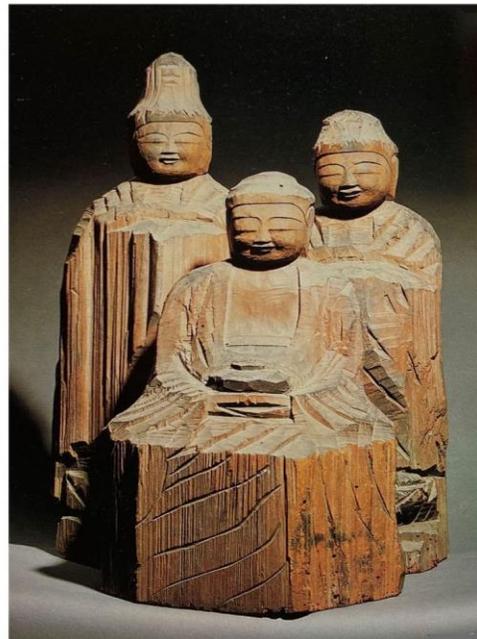
「円空展」(1)



「円空展」(2)



「円空展」(3)



「円空展」(4)

につながる柔和で慈悲深い仏顔になって引き継がれてきている。ところが江戸時代に現れた円空ともう1人の木喰(もくじき)(1718~1810)の2人は型破りの異色の彫刻家で、修験僧として或いは遊行僧として日本各地を放浪し、多くの仏像を作り寄進している。円空は3m近いものから3cmのものに至るその数12万体を制作しているという。しかし発見されているのは約5300体あるが それにしても多作である。作品は鈍(なた)彫りで野生味溢れる荒削りな作品に対し、木喰も大胆な作風だが優しい温和な風貌の仏像である。しかし日本の伝統的で繊細な造作さに対して、独創的な力強さを表現している。私もこの2人の作風を取り入れた作品を 勉強したが、大胆なノミ使いは出来なかった覚えがある。

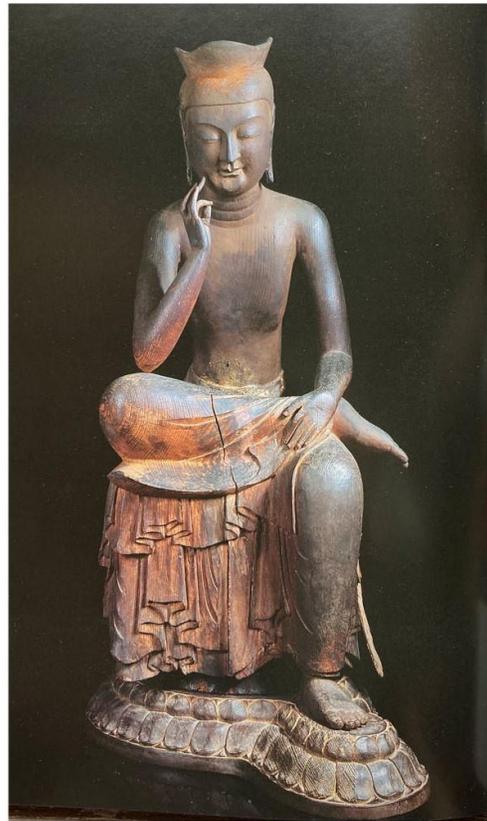


羅漢像(木喰作)

日本で彫刻の分野で国宝の指定を受けている仏像は約130点あるが、その第1号は京都の広隆寺の弥勒菩薩半跏(みろくぼさつはんか)像で飛鳥時代の作である。国宝でなくても重要文化財として素晴らしい仏像は数え切れないほど、古代から近代にいたるまで多数あるが、ちなみに円空や木喰の作品は国宝に指定された作品はない。

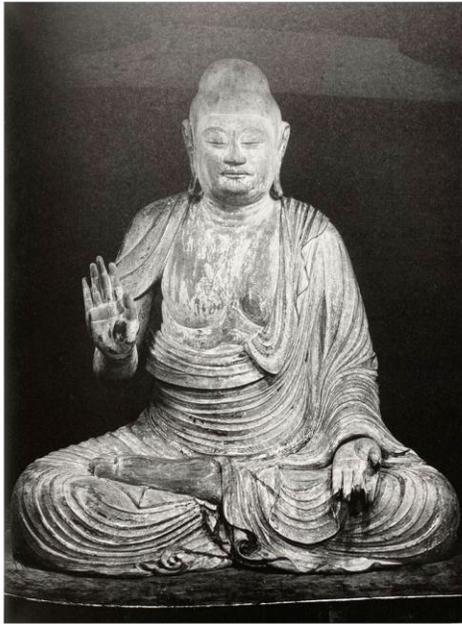
仏像といえば寺社に祀られて、人々の祈りの対象としての役割を果たしているのが一般的だが、国宝に指定されると保護のために厳しい保存の制約を受け、美術作品としての扱いを強いられることになる。

国宝仏像を最も多く有する寺は、奈良の法隆寺と興福寺で夫々17体が安置されているが、国宝級になる仏像は祈りの対象としてみるのか、芸術作品としての存在とみるのかという問題に突き当たる。基本的には寺は信仰の場である限り祈りの対象として両立されるものだろう。私は仏像制作に当たって、定型にとらわれず何か新しいアイデアを求めた美を創造し、自分なりの彫刻美を目指して制作し美術展に出品してきたつもりである。7年前に地藏菩薩像を縁あって近くの禅寺に奉納したが、その前に美術展に展示した折、作品の前に観賞者が賽銭をおかれていて驚いたことがある。私は信仰の対象として制作はしていないが、その像に対峙した人が祈る気持ちになって、手を合わせ礼拝し 安らぎ得たとすれば作家として望外の喜びを感じたものである。



弥勒菩薩半跏像(広隆寺)

奈良大和路に存在する多くの仏像を精力的に撮影してきた写真家2人を思い出すが、1人は土門拳(1909～1990)と、もう1人は入江泰吉(1905～1992)である。前者は「古寺巡礼」を、後者は「大和路 仏像巡礼」に仏像写真を掲載していて、共に仏像にカメラを向けた時の「心」を語っている。土門拳は仏像から彫刻美を探ろうと苦慮し、徹底したリアリズムの世界を引き出す姿勢で臨んでいる。例えば氏は奈良県室生寺の釈迦如来座像の美に惚れ込んだ話がある。「女人高野室生寺」の写真集に書き残されているが、「釈迦



釈迦如来坐像(土門拳撮影)



阿修羅立像(入江泰吉撮影)

如来の眼はひときわ慈悲深さがある。慈悲と智慧の二徳を備え 悟りをひらいて広く衆生を済度した仏教の祖を釈尊を言うのである。・・・ぼくは有名な寺を巡ったが、この像くらい利口で頭のいい顔をし、そして天下第一の美男の仏像はなかった。」と言う。私はこの像を初めて見た時、平安時代の作だが、堂々とした体躯と下半身の大きな三角構造の安定さと、そして全身を包んでいる衲衣(のうえ)のひだの表現が全身にわたり、大波と小波のリズミカルな美しい流れのある事を知った。彫刻家の感性というか、その創造性に感動したものである。一方入江泰吉は仏像を祈りの対象として捉え、信仰者の目線で心象的に表現し、情緒的な写真を撮って多くのファンの共感を得ている。一例として紹介する興福寺の阿修羅立像は天平時代(734年)の作として天部に属し、仏教の守り神である。材質は木材でなく脱活乾漆(だつかつかんしつ)造のため 冷たい感じがする。三面六臂(さんめんろっぴ)で顔が三面、腕が六本で様々な敵に対抗できる力を持つ像であるが、

少年の厳しい顔立ちの中にも、優しい微笑みを入江氏を見つけ表現しているように思う。

円空や木喰は伝統的な手法での仏像造でなく、野性的で亡き人の供養や祈りを意識することよりも、力強く仏の存在感を表現したかったのではないだろうかとは感じとっている。時には邪悪な厄災を払い除けてくれる怒りの像として、暮らしの中で身近にいて守護してくれる存在として愛すべき仏を表現しているように思え、改めて今回鑑賞し私も定型化しがちな仏像彫刻から一歩踏み出し、暮らしと共にある微笑ましい持念仏を創作したいものだという思いを新たにしましたものである。

令和6年4月 記

(追記)

①ハルカス美術館の円空展は、一般には会場での写真撮影は禁じられていたが、2箇所のブースだけは許可されていたので会場の写真も掲載した。

②上記文中、私が禅寺に地藏像を奉納したことを記したが、これについて高津5期HP 2017.4.23 付け(914)「古柱から仏さまが誕生」として掲載しているので、興味のある方はご高覧を。